

北大今昔 1981~2025

手 島 洋

7月第1週週末の札幌は快晴。記憶の中の札幌より暑い。今回の旅の目的は同期である園山先生と倉持先生が今年度一杯で退官されるということもあり企画された同窓会に参加することだが、生来のせっかちかつ年寄りの早起きで時間を持て余しそうなので観光客として大学構内を歩いてみることにした。とりあえず、北18条駅で降りて教養への道を歩く。懐かしの「時館」はこちらに移転、こんなところにも時を感じずにはいられない。いつ出来たのであろうかアンダーパスを横目にしつつ北18条門から構内に。メインストリートの反対側の農学部付近がはるか向こうに見える。しかし、記憶の風景と微妙に異なっている感じがする。明らかに建物が増えているのだ。聞けば獣医学部の奥にも先端系の研究施設が増えているらしい。

北海道大学が学府として成長を続けている証左なのである。ノーベル賞受賞者の出身大学としても名古屋大学に次ぐ4位、東工大と東京医科歯科大学の合体した東京科学大学と同数の実績なのである。44年前大学に入学して、4月

の講義の際に担当教官から「入学おめでとう。君たちは一流大学に入ったと思うだろうが、北大は二流大学だ。だけど全国区なのだから頑張れ」と祝辞とも檄とも言えない言葉をもらったが、どっこい中々の実績を我が母校は残しているではないか、偏差値では大学の価値は測れないのである。そんなことを考えながら、教養から恵迪寮は向かう道へ。流石に木陰の下は爽やかな風を感じる。そうそう、これが札幌の夏なのである。緑のトンネルを抜けると我が青春の多くの時間を費やしたラグビー・サッカー場である。高校のグラウンドが人工芝になっている中、未だ土のグラウンドは往時と変わらない。なんでも体育会サッカー部、創部100周年で人工芝化を働きかけているということを北大サッカー部のOBから聞いた。果たして億を超える工事費を寄付で集められるかは神のみぞ知るところだろう。そもそもいくつかある利用団体間で、歴史もOB数も違い集められる寄付の額も違うところに来て額の多少で使用権を左右されるのではと難色を示す団体もあることを体育会女子

ラクロス部出身の娘から聞いた。なかなか難しい問題である。グラウンドを覗くとラクロス部男子の学生が丁度練習を終えるところであり、練習終わりのフワツとした雰囲気は競技が違えども昔のまま。ちなみに北大体育会サッカー部OBは東京を中心に活発に活動をしており、時代を超えての付き合いは羨ましい限りである。

一旦ここでUターンしメインストリートへ。ここでも目立つのは新しい建物群である。教養生協までも通路沿いにもコミュニケーションや観光やら新しい文系の研究施設があり、当時の景色とはかなり違う。因みに工学部の裏側にも新しそうな情報系の研究施設が立ち、学生のころ情報学いまふうと言えばプログラミングの講義を受けに12条あたりにはしか関連施設がなかった情報基盤センターに行つたころとは隔世の感である。そんなこと考えながらメインストリートに出るとなんとセイコマートがあるではないか。

もしかしたら、観光客対策かもしれないけどこんなところでも札幌市に恩を売っておかないとまたゾロ、市の中心部を開け渡せと言われてしまうから、と思うのはうがった見方か。行政も北海道なのだからもう少し、土地のある欧米風の都市設計を目指したらそんなこと言わなくなるのにと
思いながら、更に南に歩くと蔭にすっきり壁を覆われた中央食堂付近に過ぎゆく時を感じながら旧理学部の総合博物

館へ。今回は植物画を求めただけだったが、かつて開館当初の頃訪れた際にノーベル賞関連の展示のコーナーを見つけたところに、我が教室の名前をパネルにみつけたときは誇らしい気持ちになったことを思い出した。現在では市民セミナーなど大学の研究をわかりやすく伝える機会はあるが、このような形で知ってもらうのもいい試みだと思う。

そして今回の旅の目的である1986年度農芸化学卒の同窓会は、旧昆虫学教室である北大ワインテイスティング・ラボで開かれる。みると今回の同窓会を企画していただいた信濃教授が何やら係りの人と交渉している、どうやら予約情報が現場に降りてきていないようである、よくある話である。しかしそこは学科長でもある信濃教授の面目躍如で事なきを得、三々五々懐かしの顔が集まってくる総勢13名。月日は過ぎ、皆還暦を超えているのだが昔の面影のままである。近況を語り合ううちに時はあつという間に過ぎていく。閉館を告げる係員の声に急かされ信濃教授の教室の大部屋に行くと休日にも関わらず研究にいそしむ院生の姿がちらほら。今回の旅が秀逸だったのは、信濃先生の計らいで3名の院生に現在の研究についてパネルをつかってプレゼンいただいたいき園山先生や倉持先生のみならずOBである我々が質問をして院生が答えるというゼミが実現したことである。産官学という言葉が示す通り、それぞ

れの立場で捉える研究は求める成果もアプローチも異なるのは言わずもがなであるが、人の幸福のためにというところでは産官学に差異はないと思っている。その点でも彼ら3人の研究は企業の理系職を務めた我々にも目的やアプローチがクリアで分かりやすく素晴らしいものであった。よく農学は実学だと言われる。この研究室も農芸化学が生物機能学科に変更になったおり、いったんは植物栄養学という名前に変わった教室名を作物栄養学に戻した信濃教授の心意気が教室の中に浸透していることがうかがわれる。すがすがしい気分で教室を辞そうと思ったら皆に後れをとってしまい迷子になりそうになった。それもそのはず、昔の農学部建物とは廊下からして違うのである。防火上の対策からか棚なんておいてないし、それこそオフィスビルのそれなのだ。さきの院生のところまで戻り丁寧に出口まで案内してもらった。この優しさもありがたい。翌日は曇り、ポプラ並木の向こうに見えた青空を思い出しつつ帰路についた。いい旅だった。

(農化・1986卒)